

私の抑留記

東京部 小野 正大

昭和十九年八月一日、浜松の中部第九十七部隊に現役志願兵として入隊しました。九十七部隊は爆撃機の部隊でしたが、掩^え体壕には飛行機もなく、一週間おりましたが飛行機は全然飛びませんでした。その間、身体検査や身の回りの不要な着物を家に送る準備をしました。いよいよ明日満州に出発となりました。

当日五時起床、制服に着替えゲートルを巻く、これが難しくて一番苦勞しました。そして本部前集合し部隊長訓示、その後各配属部隊の点呼終了、出発です。浜松駅まで行軍は一時間くらいかかり、車で数時間待たされて列車に乗り下関に向かって出発しました。列車に揺られて深い眠りに入りました。当時、浜松から下関まで一昼夜くらいかかったと思います。

下関に着くと全員下車し、再点呼終了すると今度は

船に乗り込みました。船は一時間後に出航、日本海は波穏やかで揺れもなく楽でしたが、全員無言でじっと物思いにふけていました。家族のこと、友達のこと、恋人のこと、思いはそれぞれだったと思います。

釜山港に着き上陸すると異様な臭いがしてきました。動物の腐ったような、原因はわかりませんが、鼻について御飯がのどを通りませんでした。腹が減っていたので、我慢して弁当の半分ほど食べましたが、翌朝腹が痛み出して目をさまして便所に飛び込みましたら、やはり下痢でした。弁当が腐っていたのだと思います。

釜山から列車に乗り、車中から眺める景色はいたって平凡でした。何日か列車に揺られ四平街で下車し、同年兵十人ほどで関東軍第四十二教育飛行隊に配属。練習機も十数機ありました。兵舎はカマボコ型で中は狭く、すれ違うのがやっとなという感じでした。

その部隊で数日初年兵教育を受け、吉林省の延吉に派遣されることになりました。入隊以来二週間くらいは上げ膳据え膳のようなものでしたが、延吉の教育隊

では飯上げ当番があり、最初は古年兵の方の指示でやりましたが、二度目からは自分たちでやるので、飯の配分がバラバラとか古年兵の方の飯が多いとか少ないとか、いろいろ問題がありました。回を重ねていくうちに上手になりました。

我々は航空兵なので、午前中学科を受け、午後は歩兵の訓練を受けるといいう日が毎日続きました。内務班に帰ってくると整理だなが崩されておりまして、それをもとどおりに片づけをするのに一苦労なのです。三十分もかかると「ビンタ」は飛ばし、早くしても折り目正しく整頓してないとまた崩され、てんやわんやの大騒ぎでした。こんなことが毎日行われたのです。そんなことで夜も安眠ができるどころか、いつ非常呼集がかかるかわからないのです。一カ月に三回は行われたのです。初めての非常呼集がかかったとき、だれか電気をつけ服を着ていると、内務班長が血相をかえて飛んできて、「だれが電気をつけた」と大声でどなり、電気をつけた者は出てこいといって我々を見ました。同年兵の一人が「自分であります」と言つて前に出ま

したら、班長はその人に三つ四つ「ビンタ」をくれましました。その人は口と鼻から血を流して自分の席に戻りました。非常呼集が終わつて内務班に戻ると、班長が来て「二列相對に並べ、舎前の者は舎後の者をなぐれ」と号令、我々は、一つなぐる、相手もなぐる、これを四〜五回くらい繰り返しました。一人が間違えると全体責任をとらされ、軍隊とはこういうものかと思うようになりました。我々初年兵は、非常呼集時に電気をつけてはならないということは知らなかったのです。

毎日が「ビンタ」に明け「ビンタ」に暮れるという生活でした。でもそんな中で日曜日の外出は楽しかったです。仲のよい戦友たちと待ち合わせて出かけるのです。そこは「おしるこ屋」で、我々のたまり場だったので。戦友は、山川俊一さんが立川市出身、三田一夫さんは国立市出身で、三人で心ゆくまで故郷の話などをしたものでした。

やがて一期の検閲も終わり、戦友たちも所属の部隊へ帰つていきました。

私も四平街に帰り任務につきましたが、一週間目に

転属命令が出て、あくる日出発という慌ただしさ、迎えに来た下士官と「ジャムス」の第十飛行場大隊に行きました。この部隊は三個中隊で、私は第三中隊に所属しました。

そこで藤原与一下士勤兵長の下で働きました。兵長は私に対して面倒見のよい方でした。私が兵長の肌着など洗濯をさせてくださいとお願いしても絶対させません。その理由は自分のことは自分でせよという主義でした。でも、たまに靴下くらい洗濯させてもらいました。藤原兵長は毎夜寝てからお菓子を持ってきてくれたのです。それは本当にうれしかったのですが、困ったことに早く食べないと怒られるし、音を立てないように食べて周りの人たちに気づかれないようにしなければなりませんでした。ところが気づかれてしまい、私に対する嫌がらせが始まり、靴下が物干場からなくなったり下着がなくなりしますので、兵長殿に報告しますと、その度に靴下や下着を都合してくださって、それでも私に笑顔で接してくれるのです。

ある朝、起床の号令で服に着替えてスリッパを履こ

うとしましたが、スリッパがなくなっていました。藤原兵長はすぐ気づいて自分のスリッパを私に履けと言われましたが、私は泣きながら断りました。兵長は無言のままスリッパを履かせてくれました。それは一瞬の出来事でしたが、週番下士官の点呼の号令がかかり中隊長が見え、その場は無事に終わることができました。間もなく中隊長室から藤原兵長が呼ばれ、兵長ははだしのまま中隊長室に入りました。私はドキドキしておりましたが、三十分ほどで帰ってきて、兵長は私にもう大丈夫だと言言つていきました。それから何も起こらず、ただ兵長に感謝の気持ちでいっぱいでした。

ところが内務班全員の私に向ける目が違ってきたのです。飯上げ当番はやらせてくれないうし、この班で初年兵は私一人で、あとはみんな古年兵ですので針のむしろに座らされているようなもので、もうこの中隊にはいられないと思いましたが、それでも藤原兵長は相変わらず私をかわいがってくれまして、一日もかかさず持つて来てくれたお菓子の味。

その兵長とも別れる日が来て、二月中旬ごろ転属命令が出ました。山田上等兵と私の二人で、行く先は関東軍特殊勤務隊第三二二一部隊です。場所はハルビン市郊外の孫家です。この部隊も三個中隊でした。私と山田上等兵は第三中隊に編入されました。山田上等兵は第一班で私は第三班でした。私たちの仕事は一式戦闘機の製作で、飛行機整備は軍属時代四年の経験がありました。造るのは初めての作業なので要領がわかりませんが、指導員が一個中隊五名くらいで一週間の講義があり、それから作業に入りました。我が中隊の作業は翼の部分です。主骨はできているので外板をリベットで加締める単純作業です。その作業は六月いっぱいやりましたでしょうか、あとは部品が届かなくて部隊待機。今振り返ってみますと、設備が悪くて能率が上がらなかったのではないかと思います。

日曜日の外出はやはり楽しみでした。起床二時、飯上げ二時三十分、四時には出発するのです。ハルビン市までは歩いて四時間かかりますので市内には八時ごろ着きます。初めて見る街は珍しい物ばかりで、飽き

ることはありませんでした。特に目についたのは白系ロシア人でした。スタイルがよく色白で、顔がきれいで驚くばかりでした。日系の混血児もきれいでした。馬は日本の馬より一まわりも大きくて、毛並みがよくて、すばらしい馬でした。そのほとんどがロシア人の持ち主だと思いました。市内に入る手前に「マジヤコウ」という所に飛行場がありまして輸送機が三機ありました。今に思うと七三一部隊（防疫給水部隊）ではないかと思えます。

私たちの部隊は七月いっぱい外出は中止されました。この半年間は、こんなのにのんびりした軍隊はないのではと、そう思いました。

八月に入るとソ満国境を越えたソ連軍がどんどん入ってきました。八月十五日、工場に飛行機造りに行き、お昼ごろ全員部隊へ帰れとの部隊長命令がきて私たちは部隊に帰りました。すぐ部隊本部前整列、部隊長の訓示がありまして、日本は戦争に負けたことを知らされましたが、一瞬信じられませんでした。

日本の敗戦、戦いが終わった。いろんなことが頭の

中をかけめぐって、この先の不安と、日本に帰れると
いうかすかな思いが体の中を走り抜けました。一時間
後に完全装備で本部前に集合ということで、私たちは
急いで内務班に戻り服装を整えて本部前に集合しまし
た。銃などはありませんので、腰に「短剣」と「背囊」
と「水筒」だけでした。

私たちは海林に向かつて行軍しました。三日目まで
はよかったです。三〇度を超す暑さで水筒の水は
なくなり疲労は増すばかりでした。民家の井戸を見つ
けると我れ先に走って水を飲み、水筒に水を入れ列に
戻ったときは生き返ったような気持ちでした。

さらに行軍は続き、ある山あいに来たとき昼食一時
間の休憩となりましたが、辺りから異様な臭いがして
きて食事がのどを通りませんでした。するとだれかが
死体があると大きな声で叫びましたので、私たちもみ
んな飛び出して見に行きました。幹部候補生で伍長
の衿章が見えました。顔は見分けがつかないほどに腐
っておりました。そしたらあつちにもこつちにも死体
がありまして、ここでソ連軍と戦ったのでしよう、馬

も死んでいました。そこにソ連の戦車が一台あり、砲
筒は大砲がついていて砲身の長さは五メートルくらい
もあり、この巨大な戦車に向かつて壮烈な一戦を交え
たのでしよう。一時間の休憩は過ぎ、私たちは昼食も
取らずに出発です。空腹と疲労と暑さに耐えて行軍で
す。古年兵も口をきく者もおりませんでした。

平凡な山あいの道を二時間くらい行軍して、前方に
街が見えてきました。そのとき、パンパンとかダダダ
ダと機関銃の音でしようか聞こえてきました。それか
ら一時間くらい歩いて、一面坡いちめんぼという街だったと思
いましたが、そこに到着し、小休止の号令でやつと食事
をとりました。この先の山で関東軍第五軍が終戦と同
時に山に入りソ連と戦っていて、司令部から将校と下
士官数名が第五軍のもとへ行くのですが、一人も帰っ
てこないそうで、恐らくソ連軍のスバイと思つて射殺
されたのだらうというわさでした。

その街から二時間くらい行軍して目的地の海林に到
着しました。そこで銃や剣を部隊ごとまとめてソ連軍
のところへ持っていきました。この地は火薬庫で、兵

舍くらしいは残っているだろうと思いましたが、全部焼かれて何も残っていませんでした。仕方なく私たちは中隊長を中心に円形に天幕を張り夜営に入りました。

夜は眠りに入りますが、夜中に冷えてきて眠れませんでした。こんな生活が一週間も続きました。ところどころに幅七十センチ、横二メートルくらいの土が埋まってあったのです。今思うと、あれは戦死者を弔ったものだったのです。当時は何もわからなかったのですが、そう思うと悲しみがわいてきます。

さあ出発です。東京ダモイだ。部隊全員気迫が戻ったみたいで、どの人の顔を見てもぎらぎらと輝いているようでした。まる一日行軍、横道河子おやどがしに到着。そこにはソ連軍がたくさんおり、皆自動小銃を持って「ダワイダワイ」とかけ声を上げて私たちに迫ってくるので、私たちは十五人くらいひと固まりになって命令を待っていました。そのとき、ソ連兵は銃を空に向けて引き金を引き、ダダダダ、ピュンピュンと、音と同時にうなりが至近距離なので耳の鼓膜が割れそうので、頭がおかしくなるのではないかと一瞬思いました。その

せいかいまだに耳鳴りがしています。射撃時間ほどのくらいだったのか物すごく長く感じました。やがて射撃も終わり、ほっとしている間もなく無蓋車が構内に入ってきました。すぐ乗車命令が出て、一両に一個班くらいに別れて乗車。何時間乗ったのかわかりませんが、新京駅で下車、すぐ人員点呼、各班長は部隊本部前に集合してソ連軍からの命令を受けて、明日から一週間荷役に服せということでした。

翌朝食事後、当駅の一角にある食糧倉庫より「豆かす」「コウリヤン」「米」「さけ」「ます」などを二人一組で運ぶのです。ソ連兵の監視のもと運びました。終戦の日からろくな物を食べずにやる作業はすごくつらく、体中がガタガタでした。夜はふろにも入れず着の身着のまま寝ました。

それが一週間続いてやっと東京ダモイとなったわけです。当日の朝、久しぶりに顔を洗いました。列車といても屋根つきの貨車です。いよいよソ連兵の指揮で乗車、一つの貨車に二十人くらい、起きているときはよいのですが、寝ると狭くて眠れませんでした。

車外を見ると民間人の女、子供、老人の行列が長く続いていました。それは「みじめ」というか「あわれ」というか、何とも形容しがたいものでした。市街はめちゃめちゃに破壊され、家らしきものは見られませんでした。そんなみじめな新京を後にして出発しました。車内では、果たして日本へ帰れるのか、ソ連国内で重労働でもさせられるのか、この話で持ちきりでした。

食事もどこでどうしたのか覚えがないのですが、とにかく十五日間くらいは乗車したままで、ハバロフスクより東へ六百キロくらい奥の「ガラドック」という駅で降ろされました。もう九月も終わるころだったと思います。周りを見ても山また山、人家はまばらで、町ではなく寒村でした。駅から歩いて十分くらいの所に、五千坪くらいの土地に大きな兵舎が四つ並んで建っていました。

私たちは正面より右側の兵舎に入りました。便所は全部外で、屋根はついていましたが壁はなく、外から見えるものでした。食事時間は一時間あり、飯盒を持っていって入れてもらい食堂で食べます。夜は渡され

た寝具の中にもぐって眠るのですが、なかなか眠れません。日本は遠くになってしまつて、不安が現実となつてソ連という異国の地に連行されてしまつた私たちに何が待っているのか、何が起ころうとしているのか、日本を見る日が来るのだろうかという思いがひしひしと胸を締めつけてくるのです。

私たちの中隊は伐採の作業です。シベリアの木は日本の木のような太い木はなく、せいぜい三十センチくらいの直径の太さです。両端に手で持つところのあるのこぎりで切り倒します。みんなが一緒に切り出すので、どこから木が倒れてくるのか一瞬わからないので怖かったです。何人か木の下敷きになって、死亡やけが人がたくさん出ました。

この作業期間中に、ある事がありました。戦友が「前の名前が食堂に張り出されているぞ」というので「私の名前がなぜ」と聞きますと、「作業優秀者としてあるよ」と言ってくれたので、昼食のときに食堂の奥の一番高い所の壁に作業優秀者という張り紙があるのを見ました。私の部隊で三人の名前があり、その中に私

の名前がありました。馬場班長にどうして私の名前がと聞きましたら、班長は、中隊長よりの命令で班から一名書き出すようにとのことで、一週間班員の作業状態を見て出したのだと言われました。そのおかげで食事がみんなより多くありましたが、しかし食べ盛りの方の二十歳ですから、それでも少々足りなかつたです。これはみんなを働かせて早くノルマを達成させたいソ連側の意図なのです。

毎日の食事は粗末でした。大豆や小豆、トウモロコシに魚とか野菜を入れて煮込んだもので、飯盒の底に少量ずつ与えられ、いつも空腹の状態でした。昭和二十一年の年が明けてもこの作業は続いていました。朝、氷点下四〇度に気温が上がるのを待つて出かけるのです。ソ連人の着た古着のシューバーという外とうはつぎだらけのものばかり。それを着て、靴も底に穴があいているものをフェルトではんばりした靴を履き、氷点下四〇度での作業でした。服装一つにしても、私たちはポロポロの古着に穴あきの靴、ソ連人は羊の皮の服に新しい靴といったぐあい、これがスターリンの

やり方なのでしょう。

夕方兵舎に戻り、冷えた体をペーチカに火をつけて暖をとりました。夜は零下六〇度くらいに下がり、窓のガラスがピシピシと音をたてて細かく割れるのです。酷寒の冬もゆるみかけたころ、作業は土木の作業で、駅をつくるため山のすそを削り取って、その土を低い方に落としていく作業になりました。今日本にある一輪車の木製でできているものをロシア語で「ターチカ」と呼んでいました。そのターチカに削った土をスコップに入れて運びますが、その土は砂や石がまじっていて、削るのも運ぶのも困難でした。五十人くらいで横一列に並んで作業しているので、早い遅いが目立ちますので全員が一生懸命働きました。それが三カ月も続きますと体力の差が出て、遅れたところへ早く進んでいる者が回されます。進めば進むほど土の高さが高くなるので、ツルハシで崩してスコップでターチカに積み運ぶ毎日が競争でした。

ある夜、戦友が腹が減って眠れないから私と一緒に来てくれないかと相談されて、私も見かねて一緒に炊

事場の倉庫に「ジャガイモ」をもらいに入りました。

中は真つ暗で、手探りで探しているうち、わらで編んだ「コモ」に手が触れ、この中にあるぞと思って「コモ」の中に手を入れたら、おかしな固い物に触れました。何だろうと思つてよくさわつてみたところ、人間の足だとわかつたとき、驚きで一瞬目の前が真つ白になつて、頭に血が上つて破裂しそふでした。それでもジャガイモを三つばかり見つけ、戦友に死体の事を知らせ、手探りで外に出ました。戦友にジャガイモを渡し兵舎に帰り寝ましたが、眠れませんでした。

それから、ある中隊では、起床のサイレンが鳴つても起きない戦友をゆり動かしたら死んでいたそうです。それに、真夜中に便所に行った人が帰つてこないので行つてみると便所の前で死んでいました。こうして死んでいく人が続きました。栄養失調と過度の疲労が重なつていたのだと思います。この部隊で何人の戦友が犠牲になつたかは私たちにはわかりませんが、こんな狭い寒いところで生命を失つた人たち、だれにも知らされることもなく済まされるのは、ソ連軍の命令だつ

たのでしよう。

やつと作業も終わり、翌日身体検査があるということとで入浴の命令あり、全員外の浴場で順番を待つこと一時間以上かかり、兵舎に帰ると全員の装具が投げ出されてありました。万年筆や鉛筆、手帳、日章旗、腕時計、小刀など大事な物は全部盗まれていました。

次の日、朝から身体検査があり、人員は四百人くらいだと思ひます。軍医が四人、女医一人が始まり、検査内容は聴診器を胸に当て、あと腕の肉を引つ張り、これで終わり、簡単なものでした。そこで私はオーカーと診断されて、翌日軍医が来て、私に「お前はオーカー（栄養失調）だから収容所が変わる」と言いました。次の日、縫製工場に行くように指示され、歩哨一人と二人で一時間くらい歩いて行きました。私の連れていかれたところは大きな部屋で、ベッドが五十くらいありました。そこで私は一人で留守番をしているように言われました。

毎日部屋の掃除くらいで何もすることなく約一カ月くらい置かれて、また原隊に帰され、今度は鉄道工事

につきました。名も知らない川の中に鉄橋の橋ゲタをつくる作業でした。三交代で続けられました。川は凍っていてその上をトラックがチェーンをつけて走っているのには驚いてしまいました。トラックの運転手は全部ドイツ軍の捕虜だそうで、ノルマ制で働いているのか、すごく飛ばしていました。この作業も寒さが厳しく、シベリアに来て一番寒かったと思います。この工事が終わって兵舎に帰った翌朝に、食後各自荷物をまとめておくように指示がありました。荷物といっても軍より支給されたものはほとんどなく、水筒と飯盒くらいでした。

私たちの今度行くところはウルガルだと聞かされ、そこはどこなのだろうか地理もわからず、ただ不安でした。列車到着の知らせで、私たちは中隊に別れて列車に乗り込みました。発車してから二十四時間くらい乗っていたと思います。終点で降り、約一時間くらい歩いてやっと私たちの収容されるラーゲルが見えてきて、所内では大きな家を建てている風景もあり、やがてゲートを通して、そのまま食堂の前へ並び点呼。

その後所長（ロシア人）が何やら話し、その後生駒さんと五十くらいのかつ幅のよい人が話をして終わり、私たちはラーゲルを割り当てられて落ち着きました。夜になって生駒さんが見えて、あすからの作業を説明してくれました。それは貨車下ろしの作業で、起床は午前三時ということでした。これは大変だなーと思いました。

翌朝午前三時に起床、ラーゲルを出しました。作業は、一車両の土砂下ろしを一時間以内にすませ、次の車両に移り、これも一時間以内で下ろす。これの繰り返しです。車両は五十トン貨車で無蓋車です。土砂といっても土は粘土で砂はこぶし大の石がまじっていて、スコップに粘土の土が粘りつくので作業は本当に大変でした。一車両四人で組み、休まず作業しても五十分ばかりでした。次の貨車が着く間に食事を取ります。いつの作業も厳しかった。栄養失調になりながらもよく体がついているものだと思いつながら、ふと夜空を見上げると北斗七星が頭上に輝いていました。日本で見える北斗七星は東の空から西へ大きく動くのに、シベリ

アでは私の頭上で小さく一周するので驚きでした。いかに北極に近いかを感じました。

鉄道作業が終わったところに私は友の家という収容所に行くことになりました。日本人の通訳の人に連れられてトラックに乗り、一時間くらい走ったら大きなラーゲルが見えてきました。そこが友の家でした。通訳の人と二人で一カ月のんびり過ごせるということで部屋に入りました。ベッドは五、六並べてあるきれいな室で、今まで私たちがいたラーゲルとは違っていました。毎日することがないので図書室で本を読みました。

日本人向けの本がかなりありました。小林多喜二とかマルクス資本論とか日ロ戦争とかロシア革命、弁証法的史的唯物論などがありました。そのような難しい本は読む気になりませんでした。同行の通訳の人はハルビン学園を出た人で、十歳くらい上のおとなしい人でした。この学園はロシア語を専門に教育する学校で、卒業生は全部特務機関に入るそうです。その人のおかげでロシア語を大分教えていただきました。そうこうしているうち一カ月は瞬く間に過ぎ、元のラーゲ

ルに戻る日がきました。

出発のとき、通訳の人と二人で所長の所へあいさつしてゲートを出ました。ゲート前で待つこと数時間ありました。友の家での生活は夢を見ていたような気がしません。地獄で仏に会った思いでした。そのうちに輸送車が来てそれに乗ってラーゲルに帰りました。帰るとすぐに次の作業が待っていました。国営農場に行つて作業です。私たちの班は十五人で、朝八時に出発、ソ連兵が二人ついて農場に向かって歩き出しました。

道は狭く曲がりくねっていて方角はわかりませんが、三、四時間歩いたときに前方から合唱の音が聞こえてきました。近づくると十五人くらいのロシア人の男性が「ボルガの船唄」を歌っていました。そこは川が流れていて、その川を渡る舟を待っているながら歌っていたのです。私たちもそこで小休止し彼らの歌を聞いていました。それはきれいなハーモニーで、日本の合唱団では及ばないほど音量があり最高のものでした。

歌声に酔いしびれて出発となり、川に沿って再び歩き出しました。一時間くらい歩いて農場が見えてきま

した。農場の向こう側に女性の刑務所があり、反対側に民家が五、六軒あり、その民家の前で止まりました。ソ連兵が通訳を通して一軒に三人ずつ入るように命令しましたので、私たちは三人ずつに分かれて家に入りました。食糧は刑務所から車で届けられ、食事をつくって食べましたが、もう遅い食事でしたのですぐ眠りに入りました。

翌朝六時、刑務所のサイレンで起床、朝食をとり、係員の来るのを待ちました。やがて係員が来て、係員の指示でジャガイモを拾う作業でした。各人南京袋を持って広い農場に行きました。まるで飛行場のような広さです。そこで芋拾いを始めました。毎日毎日拾っても拾ってもありました。そのジャガイモは「カレットウチカ」という種類で、とつてもおいしくて、木の棒でつきますと餅のように粘って、なおおいしく食べました。

ここでは夏になると日中の日が長く、日の出が午前二時ごろで日の入りが午後九時ごろになりますので、夜は四時間くらいしかありませんので睡眠不足に悩ま

されました。

次の作業は草刈りでした。背丈もある柄の長い鎌をかついで山に入ります。山といっても雑木林です。早い話が人跡未踏の地といった方がよいほど木が茂っていました。一歩足を踏み入れると、ぶんぶんという物すごい音が聞こえてくるので、何だろう思つて四方を見渡してみると、うす黒く固まったものが動いていて小さな虫ということはわかったのですが、そばに寄りつけません。すると後の方から、指揮官でロシア人のヤコベンコという人が、アミの帽子をかぶれと指示して、みんなその帽子をかぶつてその人の後について行きました。その虫は蚊でした。日本にいる蚊の三倍はあろうかと思われるものでした。その蚊に血を吸われると一時間はもつまいとということを聞かされ恐ろしくなりました。そこにはキノコがたくさんありました。私たちは腹の足しにするために千本しめじをよく食べました。塩を入れて煮て食べるのです。なぜかキノコは毎日食べても飽きませんでした。その草刈り作業も終わりになったころは九月も半ばに入つたと思えます。

翌日出発ということで、その夜は深夜まで全員で語り合いました。その話の中に出てきたのは近所に住む民家の美人の娘の話でした。二十歳くらいで色は白く、すらりと伸びた背丈に長い髪を後ろにたばねて人形に見えました。何でこんなシベリアの奥地にいるのだろうかとか、父親と母親と一緒になのですが、中国人のようであり、ロシア人なのだろうかとか話していました。娘さんに近づいて話をした者はいなかったようです。そうしているうち夜が明けました。

朝食を済ませてソ連兵の点呼を受けて出発です。また歩いてラーゲルに戻りました。ちょうど昼食時だったので皆で昼食を取り、久しぶりで余裕のある食事時間をとりました。次の日からはラーゲル内の掃除をしたりして、作業という仕事はなかったようです。そんなことで四〜五日過ぎた朝の朝礼で、日本への帰国命令が出て、十名くらいの人が呼び出された中に私も入っていました。その瞬間血が一遍に頭に上ってしまった感じで、頭の中が真っ白になってしまいました。うれしかったです。

午後から下着、ズボン、靴、上下の服などをもらい、班内に帰る道すがら喜びがひしひしと胸の中にこみ上げてきました。一緒に帰りたいかという戦友と一夜を語り明かして朝出発でした。ラーゲルを出るまで多くの戦友の見送りを受け、うれしかったのですが、残った戦友たちの気持ちを思うと複雑な思いでいっぱいでした。

輸送の車で最寄りの駅まで行き、貨車に乗って一路ハバロフスクに向かいました。もう昭和二十三年十月に入っていました。揺れる列車の中で脳裏をかすめることは、酷寒の厳しい作業や空腹と栄養失調の苦しさ、南京虫やダニにさいなまれて眠れなかった夜、日本の土を踏むこともなく去っていった戦友、今別れてきた戦友の顔!! 顔!! 若い血を躍らせて日本軍人に志願した自分は一体何だったのだろうか?

とめどもなく思いがめぐってきていたとき、チクリと両足のくるぶしのところに激しい痛みが走って思わず現実に戻されました。ダニに食われ常に化膿していたのです。作業中はそばを流れている川の中に入り膿

を絞り出して乾かしますが、またそこを食われるので、同じことの繰り返しでした。十日近く列車の中でやつとハバロフスクに着きました。下車すると大勢の戦友がおりましたが、知っている人の顔はなく初対面の人たちばかりでした。私たちは建物の中に入り、本人かどうかのチェックを受け長い時間待たされたので、とっても不安な気持ちになりました。

そしたら私たちにお金をくれたので驚きました。百二十ルーブルでした。そのお金を握り締めながら、三年余りダワイダワイと重労働を強いられ悪い食事、娯楽などあるわけもなく大変な作業量だった、シベリア抑留の悪夢の代償かと思いがら、さてこのお金をどう使おうか考えました。まず時計、パン、タバコと頭に浮かべ、外出許可を得て販売所に行き時計が欲しいというと、日本人に売りませんと断られたので、パンとタバコを百二十ルーブルくれといったら黒パン一個とタバコ（パビロス）六十個ありました。翌々日ナホトカに向け出発しましたが、本当に日本に帰れるのだろうかと不安はいつもありました。私たちは、ソ連

兵に東京ダモイ、東京へ帰るといってシベリアに連行されたので、ソ連の国自体を信用しませんでした。

ナホトカまで一昼夜くらいで到着したのです。海が見えたときは内心ホットしました。一週間くらい待機したと思います。その翌日から船が来るまでまた作業でした。何と人使いが荒いもんだと無性に腹が立つてきました。これぐらい我慢しなければと思ひ、作業は道路工事をやりました。

やつと船が到着しました。船腹には「信濃丸」と書かれていました。ああ本当に帰るのだ、口の中で何度もつぶやきました。やがて乗船です。私たちの隊は一番最後の方でした。この船は客船か貨物船かわかりませんが、畳が敷いてありました。いよいよ船が動き出しました。一時間くらい過ぎたころ昼食になりましたが、船が木の葉のように揺れ出して、五千トン級の船と聞いていましたが、この大きな船が波の谷間に入ると隣の船も全然見えなくなります。それほど大きい波が上下に船を揺らしました。

みんな船酔いで吐いておりましたので、昼食を取る

人は少なかつたです。でも私は腹が減っていたので昼食を取りにいき、食事を受け取ったときのうれしさは最高のうれしさでした。白い飯にカレーが乗って、夢にまで見たカレーライスだったので。三年ぶりで食べたのですから、そのおいしかったこと最高でした。

一夜が明けて朝食を取り自分の席で横になり戦友たちと話し合っていると、だれかが「舞鶴が見えたぞ」と言う声に、飛び出していきますと緑の島が見えました。三年ぶりに見る日本は美しく、懐かしさがこみ上げてきました。思い返せば、ソ連の国はまずい国だつたと思う。私たち抑留者を囚人並みの扱い、多くの戦友たちを死に追いやった医療の貧しさ、食事は犬や猫のえさのようなもので、よく生きて帰れたものだと不思議な思いです。

舞鶴に上陸です。日本の土地を踏みました。足元が震えているように思いました。船から降りて待っていたのはDDTの消毒で、頭から足の先までかけられ驚いてしまいました。その夜はふるに入りシベリアのほこりを全身から洗い流しさっぱりした後、海軍の飛行

予科練生の服をもらいました。着てみると七つぼたんに襟にイカリの服だったので。あの若い血潮の予科練にあこがれ特攻機で散っていった若者の話を聞かされまして、その若者たちの思い、戦後シベリアで事故や病気で永眠した私たちの戦友たちの冥福を祈りながら、舞鶴の地を後に故郷に向かったのです。

品川の駅に着いたとき、窓から父と幼友達の二人が駆け寄ってきて「正ちゃんここでおるんだ」と大声で叫びましたので、私はびっくりして荷物をまとめ下車しました。父や友達の顔がかすんで「ただ今帰りました」と言うのがやつとでした。電車の中で、母のこと、弟や妹も元気で、戦災にも遭わなかったことを父はポツリポツリと話をしてくれました。荒れ果てた東京の街を過ぎて家に着きました。母は赤飯をたいて待っていてくれました。その夜は父や母と弟妹たち一家で私の帰りを祝ってくれました。話は尽きることなく続き、夜もふけて我が家の床で深い眠りに入りました。時は昭和二十三年十月二十五日、私が二十三歳一月でした。